

イテリメン語西部語南北方言とチュクチ・コリヤーク諸語 —語彙から見た接触・系統関係の再検討—¹

小野 智香子

キーワード：イテリメン語 チュクチ・カムチャツカ諸語 系統関係 言語接触

1. はじめに：チュクチ・カムチャツカ諸語の系統問題

イテリメン語の系統的な位置づけについては、研究者によって異なる見方がある。伝統的には、イテリメン語とチュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語は同系で「チュクチ・カムチャツカ語族」を構成するとみなされており (Bogoras 1922, Скорик 1958), 近年では Fortescue (2003, 2005) などがこの立場を取っている。他方、20世紀初めにヨヘリソンによって記録されたイテリメン語のテキスト (Worth 1961) を詳細に分析してイテリメン語辞書 (Worth 1969) を編纂したワースや、イテリメン語を専門に研究したヴォロージン、チュクチ語・コリヤーク語・イテリメン語を音声学の観点から研究したアシノフスキーは、イテリメン語がチュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語とは系統の異なる孤立言語であると主張しており (Worth 1962, Володин 1997a, Асиновский 2003), 近年では金子 (2011) がこの説を支持している。チュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語は語彙、文法ともに非常に良く似ており、これらの4言語の同系性には疑いがないとみられる。しかしイテリメン語はチュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語とは一部の語彙と動詞の法・人称接辞に類似点が見られるものの、音韻から形態・統語構造に至る様々な点で大きく異なっている (表1)。

表1 イテリメン語とチュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語との相違点

	イテリメン語	チュクチ語, コリヤーク語, アリュートル語, ケレク語
音節構造	母音連続を避けるために子音を挿入	子音連続を避けるために母音を挿入
名詞・形容詞の人称	標示しない	標示する
名詞項と格	S=A=O (絶対格)	S=O (絶対格), A (能格)
テンス・アスペクト表示の位置	語根の後のみ	語根の前・語根の後
語幹結合 (複合語形成)	しない	する
抱合	しない	する

(Володин 1976, 1997b, 1997c, 1997d, Georg & Volodin 1999, Скорик 1961, 1977, Жукова 1972, Нагаяма 2003 の記述に基づき筆者が作成)

¹本稿は科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 「イテリメン語の語彙データベース構築と比較研究—系統・接触関係の解明に向けて—」 (平成 23 年度~26 年度 基盤研究 C, #23520493) および NSF 助成金 "Collaborative Research: Comprehensive Itelmen [itl] Dictionary"(2013-2016, #BCS-1263668) の助成による研究成果の一部である。

イテリメン語を含めたチュクチ・カムチャツカ諸語の比較研究は Fortescue (2003, 2005) が行っている。Fortescue (2003)はチュクチ・カムチャツカ祖語を再構し、チュクチ語派（チュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語）とイテリメン語の系統関係の立証を試みた。その主な根拠として名詞と動詞の屈折接辞や声門閉鎖音の歴史的变化を挙げ、両グループの同系性を主張している。イテリメン語系の3言語（次節にて後述）についても「イテリメン祖語」(Proto-Itelmen)の形態素のリストが記述されている (Fortescue 2005)。いずれにせよ、Fortescueの研究では、これらの言語の同系性という点に重きが置かれている。

本稿では、まず現代イテリメン語（西部語）の南部方言と北部方言の語彙を比較し、同起源の語彙と異なる語彙を分類し、その同異が何に由来するかを明示して、語彙全体の構成を明らかにすることを目的とする。近年のフィールド調査で得られたより多くの言語データを元に、イテリメン語の南北方言の比較を軸として、系統的帰属問題を含めたイテリメン語とチュクチ・コリヤーク諸語との関係を再考する足がかりとしたい。

2. イテリメン語のグループ・方言について

2.1. イテリメン語のグループ・方言の概略

イテリメン語にはかつて東部語、西部語、南部語の3つのグループがあったことが記録されている。クラシェニンニコフは、イテリメン（カムチャダール）を言語の違いによって、「北の民 северный народ」（カムチャツカ川の谷とウカ川～ナラチェヴァ川の東岸）、「南の民 южный народ」（ナラチェヴァ川～ロパトカ岬の東岸、ロパトカ岬～ハイリューゾヴォ川の西岸）、「西の民 западный народ」（ハイリューゾヴォ川～チギリ川の西岸）の3つに分類した (Крашенинников 1949: 358)。クラシェニンニコフが「北の民」と呼んでいたグループの居住分布から、ヴォロージンはこれを東のグループとし、「東部語」「西部語」「南部語」に分類し直した (Володин 1997: 60)。イテリメン語系のグループにはこの3つの言語があり、チュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語との系統関係を認めない場合はイテリメン語族、系統関係を認める場合はチュクチ・カムチャツカ語族においてチュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語のグループと早い段階で分岐し、イテリメン語派を成したと考えられる。東部語と南部語は19世紀末までに消滅してしまい、現在は西部語のみが残存している。

2.2. イテリメン語西部語南北方言の違い

現在のイテリメン語（西部語）はカムチャツカ半島の北西部（カムチャツカ地方チギリ地区）で話されている。北部方言は、地区の中心地であるチギリ村に移住したセダンカ・オセードラヤ村出身者によって話されている。南部方言は、ナパナ村、ウトウホロク村、ベロゴロヴォエ村、マロシェチノ

エ村, ソポチノエ村, コヴラン村, ハイリューゾヴォ村出身者により話され, 話者の大部分はコヴラン村とハイリューゾヴォ村に居住していた。両方言では部分的に語彙が異なるほか, 規則的な音対応, 若干の文法形式の差異が挙げられるが, 文法構造上の大きな違いはない。

南北方言の差異について具体的に述べると, 次のようである。まず南部方言で規則的に起こる母音交替が, 北部方言では起こらない傾向がある (話者による個人差が見られる)。代表的なものでは, 動詞が不定詞を形成する際に, 南部方言では弱母音 (i, u, e) が強母音 (e, a, o) へ規則的に交替するが, 北部方言ではこの交替は起こらない (表 2)。

表 2 不定詞の形成と母音交替の有無

意味	動詞語幹	不定詞	
		北部方言	南部方言
食べる	nu	nu-kes	no-kas
飲む	(w)il	il-kes	wel-kas
流す	ins	ins-es	ens-es
満たす	tχnu	tχnu-s	tχno-s

接頭辞 t- (直説法 1 人称単数), k- (形動詞など), q- (希求法 2 人称) が動詞語幹につく際, 北部方言では共鳴音 sonorant (母音 i, e, a, o, u, ə および鼻音 m, n, nʲ, ŋ, はじき音 r, 有声側面音 l, ʎ, 接近音 w, j) の直前の位置で放出音化するが, 南部方言では母音と n の前でのみ放出音化が起こり, その他の共鳴音は放出音化を引き起こさない² (表 3)。

表 3 語頭接頭辞における放出音化の南北方言比較

	北部方言	南部方言	意味
母音の前	tʰ-anlneʔl-kicen	tʰ-anlneʔl-kicen	私は読んだ
n の前	tʰ-nu-kicen	tʰ-nu-kicen	私は食べた
ŋ の前	tʰ-ŋalx-kicen	t-ŋalx-kicen	私は結婚した
m の前	tʰ-maʔl-kicen	t-maʔl-kicen	私は遊んだ
l の前	qʰ-la-xcix	q-la-xcix	話せ
r の前	tʰ-retla-kicen	t-retla-kicen	私は夢を見た
w の前	tʰ-wetat-es-kicen	t-wetat-es-kicen	私は働いている
j の前	kʰ-jalet-knin	k-jalwet-knen	彼は引越した

(南部方言のデータは Georg & Volodin 1999 および Володин и Халоймова 2001 から筆者が抜粋)

南部方言には「円唇化」という現象がある。これは, 語あるいは形態素全体が円唇を伴って発音される現象であり, 語頭に ° の記号で表される (Georg and Volodin 1999: 24-27)。円唇化は南部方言にの

² Georg and Volodin (1999: 47)では, 南部方言で放出音化が起こるのは「母音の前の位置」とされているが, 実際には n の前でも放出音化が起こっている。

み観察され、北部方言には見られない（表4）。また、チュクチ語やコリヤーク語にもない現象である（Asinovskij & Volodin 1987）。

表4 円唇化の有無

北部方言 (円唇化なし)	南部方言 (円唇化あり)	意味
plax	°plax	大きい
kasox	°kasox	側
sisal	°sisal	草むら
pakuk	°pakuk	ひな鳥

その他、北部方言と南部方言の違いとしては、両唇軟口蓋音 /w/-/ɱ/ および歯茎摩擦音 /z/-/s/ における有声・無声の規則的な音対応がある（表5）。北部方言では有声音となっている箇所が、南部方言では無声音になる。例えば witwit（北）/ ɱitɱit（南）「アザラシ」、zink（北）/ sink（南）「森で」などである。

表5 有声音・無声音の規則的対応

北部方言	南部方言	意味
witwit	ɱitɱit	アザラシ
walc	ɱalc	ナイフ
wjal	ɱjal	吹雪
zalk	salk	後ろに
zink	sink	森で
zunɫ	sunɫ	住む

イテリメン語西部語南北方言には以上のような形態音韻上の差異があるが、語彙の違いも多く見られる。以下第3節ではイテリメン語西部語における南北方言の語彙を比較し、隣接するコリヤーク語、アリュートル語、チュクチ語の語彙とあわせて検討する。

3. イテリメン語西部語南北方言とチュクチ・コリヤーク諸語の語彙の関係

イテリメン語西部語の南北方言の語彙を比較すると、コリヤーク語と隣接している北部方言の方がコリヤーク語からの借用語が多いことが知られている。そこで、具体的にどのような借用が見られ、南部方言とどのような語彙の差があるのか検討したい。

本節ではイテリメン語（以下「イテリメン語」は西部語を指すものとする）の北部方言と南部方言の語彙の同異を基準とし、チュクチ・コリヤーク諸語（チュクチ語・コリヤーク語・アリュートル語・ケレク語）の語彙との形態的対応関係という観点から考察する。語彙は、『アジア・アフリカ言語調査表 下』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979）の語彙項目 No.1～No.1000 をも

とに、チュクチ語(Ch)・コリヤーク語(K)・アリュートル語(A)・イテリメン語北部方言(NI)・イテリメン語南部方言(SI)の語彙をフィールド調査に基づいて報告した Kurebito et al. (2001)を使用した。なお Kurebito et al. (2001) にはイテリメン語南部方言の円唇化記号は記載されていないが、本稿の分析には影響がないため、記載されたデータをそのまま使用する³。また 1000 の語彙項目の中には該当する語がない項目や、ロシア語をそのまま使う項目が多数あったため、実際に比較・対照可能な語は延べ 505 例であった。

3.1. 南部方言と北部方言で同起源の語彙

まず、イテリメン語南部方言と北部方言で形態的に同一または同起源と見られる語彙と、チュクチ・コリヤーク諸語の語彙の間にどのような相関関係があるのか見ていきたい。

3.1.1. チュクチ・コリヤーク諸語との形態的差異が大きい語彙

イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源で、チュクチ・コリヤーク諸語との形態的差異が大きい語彙は 325 例あった (表 5)。

表 5 SI, NI が同一または同起源, かつチュクチ・コリヤーク諸語との形態的差異が大きい語彙 (325)

No.	Rus	JPN	SI	NI	K	A	Ch
9	рот	口	qəsx	qəsx	jəkɪŋən	rəkərŋən	jəkərŋən
13	зуб	歯	kəpkəp	kəpkəp	wannəlŋən	wannəlŋən	rənnəlŋən, wannəwan
19	горло	のど	k'ik'	k'ik'	pɪlŋən	pɪlŋən	pɪlŋən
31	палец	爪	k'uxk'ux	k'uxk'ux	vayəlŋən	vayəlŋən	wayəlŋən
135	река	川	kiw	kij	wejem	wajam	weem
141	море	海	qɪχ	qɪχ	aŋqan	aŋqan	aŋqə
143	вода	水	iʔ	iʔ	miməl	miməl	miməl
146	почва	土	səmt	səmt	n'ucelqən	məlŋən	nutesqən
155	дождь	雨	cuφcuφ	cuφcuφ	muqemuq	arŋin	itiil
159	солнце	太陽	lac	lac	tijkətij	titkətit	tirkətir
361	резать	切る	əmpχes	əmpχes	cəvik, cəvitkuk	səvikki	səwik
392	находить	見つける	ckekas	ckikes	ləʃuk	ləʃukki	lʃuk
427	большой	大きい	plax	plax	nəmejəŋqin	nəmejəqin, nəsmasqin	nəmejəŋqin
475	темный	暗い	txunlax	txunlax	nəvutqəqin	nəvusqəqin	nəwusqəqin

No.9「口」, No.13「歯」, No.19「のど」, No.31「爪」などの身体名称, No.135「川」, No.141「海」, No.143「水」, No.146「土」, No.155「雨」, No.159「太陽」など自然物, No.361「切る」, No.427「大きい」

³ Kurebito et al. (2001) では無声両唇軟口蓋摩擦音 /m/ ではなく、無声両唇摩擦音 /ɸ/ として表記されているが、本稿ではその表記のまま引用する。

など多くの動詞・形容詞において、イテリメン語南部方言と北部方言で同一または同起源であるが、チュクチ・コリヤーク諸語と同起源である積極的な根拠は見いだせなかった。これらはイテリメン語に固有の語彙と考えてよいだろう。

3.1.2. チュクチ・コリヤーク諸語と形態的な対応が見られる語彙

イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源で、チュクチ・コリヤーク諸語と形態的な対応が見られる語彙は 58 例あった (表 6)。

表 6 SI, NI が同一または同起源, かつチュクチ・コリヤーク諸語と形態的な対応が見られる語彙(58)

No.	Rus	JPN	SI	NI	K	A	Ch
35	печень	肝臓	pontapont	pontapon	pontə	punta	pontə
89	рыба	魚	ən'c	nənc	ənnəʔən	ənnəʔən	ənnen
256	как	どう, どのように	manke	mank	miŋkəje	maŋkət	miŋkəri
346	варить	煮る	kokas	kokazos	kukejvək, əpatək	kukevək, əpatək	əpatək
366	работать	働く	wetatkas	wetatkes	vetatək	vitatək	miʔsiretək
623	весна	春	anok	anok	anoan	anuʔan	yeron, yeronet
236	другой	他の	qula	qula	qullu, vatqen	vasqin	eɬwelʔin
347	гнать	追う	ajtates	ajtates	ajtatək, jeqeʕavək, ʔətavək	kələlʔatək	əytatək, kələlʔetək, welerkələk
493	нет	いいえ, いや	qaʔm	qaʔma	qəjəm, ujje	allə	qərəm
144	лет	氷	ketwol	ktwol	ittəʔit	kityəlʔ, ittəʔit, yilyil	tintin
805	связывать	縛る	omtes	omtes	kəltək	kəltək	enomatak
208	ребенок, дитя	子, 子供	n'ien'ekecɯ	n'ien'ekecɯ	kəmiŋən, kəmiŋəpilʔ	un'un'u	nenənə

そのうち、チュクチ語・コリヤーク語・アリユートル語との対応が見られる語彙は、No.35「肝臓」、No.89「魚」、No.256「どう, どのように」など 20 例, コリヤーク語・アリユートル語との対応が見られる語彙は No.346「煮る」、No.366「働く」、No.623「春」など 17 例, コリヤーク語のみとの対応が見られる語彙は No.236「他の」など 5 例, チュクチ語・コリヤーク語との対応が見られる語彙は No.347「追う」、No.493「いいえ」など 5 例, アリユートル語のみと対応を示す語彙は No.144「氷」など 5 例, チュクチ語のみとの対応を示す語彙は No.805「縛る」など 4 例, アリユートル語・チュクチ語との対応を示す語彙は No.208「子供」など 2 例である。

3.2. 南部方言と北部方言で異なる語彙

次に、イテリメン語南部方言と北部方言で形態的に異なる語彙について、南部方言, あるいは北部

方言と、チュクチ・コリヤーク諸語の語彙との間にどの程度の相関関係があるかみていこう。

3.2.1. チュクチ・コリヤーク諸語との形態的差異が大きい語彙

イテリメン語南部方言と北部方言で異なり、かつチュクチ・コリヤーク諸語との形態的差異が大きい語彙は 91 例あった (表 7)。

表 7 SI, NI で異なり、かつチュクチ・コリヤーク諸語との差異が大きい語彙(91)

No.	Rus	JPN	SI	NI	K	A	Ch
1	голова	頭	ktχəŋ	qəmt'q'ol	lewət	lawət	lewət
74	лук	弓	kaʔiŋan	losx	əjət	ərəttən	tiŋur
152	ветер	風	spəl	wiwən	kəwew, kəteyən	kətiyyə, kətiwwə	kətəjyən
367	устать	疲れる	qeʔnekas	uratkes	peŋʔevetək, məcek	məsakki, paŋatək	peŋʔiwetək
379	копать	掘る	satos	tʔeŋes	jəyək	wəlpətkuk, ulyəvŋətuk	rəyətukuk
413	идти, ехать	行く	elkas	pikikes	jeləŋ tək, qətək	awwəvək, təlakki, qətəkki	qətək, tək
471	многий, много	たくさん, 多い	ptos, escaq	niynil, nijnil	ŋənvəq	amkəla, ŋənvəq, avissəka	nəmkəqin

No.1「頭」、No.74「弓」などの名詞、No.367「疲れる」など多くの動詞、No.471「たくさん、多い」などの副詞が挙げられる。これらの語彙は、南北方言でそれぞれ形態が異なるが、チュクチ・コリヤーク諸語との形態的な対応も見いだせない。従って、これらの語彙はイテリメン語南北方言それぞれの固有語である可能性が高いと考えられる。

3.2.2. チュクチ・コリヤーク諸語との形態的対応が見られる語彙

南北方言で異なる語彙のうち、イテリメン語北部方言あるいは南部方言とチュクチ・コリヤーク諸語の間に対応が見られる語彙を以下に挙げる。

3.2.2.1. 北部方言と形態的対応が見られる語彙

イテリメン語北部方言と、チュクチ・コリヤーク諸語との間に形態的な対応が見られる語彙は 22 例あった (表 8)。

表8 SI, NI が形態的に異なり, NI とチュクチ・コリヤーク諸語に対応が見られる語彙(22)

No.	Rus	JPN	SI	NI	K	A	Ch
173	завтра	明日	azosk	mitew	mitiw	mitiv	ergatak
284	танцевать	踊る	estelkas	mławokes	məlavək, kopl'acek	məlavək	puturek
773	обманывать	騙す	majakas	tenmekes, intenmes	tinmetək, jətinmetək	tinmək	ʔərʔuntetək
325	спать	眠る	ɲeklkas	jəlqekes	jəlqetək	jəlqatək	jəlqetək
766	спрашивать	問う	lenʔlos	pəɲlos	pəɲlək	pəɲluk	pənlək
937	любимый, милый	可愛い, 愛らしい	c'ininlax	nmelxoqen	nəmelqin, enʔelu ləɲəlʔən	-----	ʔəlyu lənjo
604	песня	歌	caqalnom	ɲrep	quliquł	quliquł, aɲaɲtan	ɲerep
402	встречать	会う	cawakas	jawnas	jawnak, jətʔetvəlɲək, jətʔetek	juʔəvəlɲək	jəɲnak, lʔuk
545	ловушка, западня	罾	ənkenom,	ixoplixop, enat ⁴	ləɲəp, enat	in'at	ləɲəp

アリユートル語・コリヤーク語との対応が見られる語彙は No.173「明日」、No.284「踊る」、No.773「騙す」など9例、チュクチ語・アリユートル語・コリヤーク語との対応を示す語彙は No.325「眠る」、No.766「問う」など5例、コリヤーク語のみとの対応を示す語彙は No.937「かわいい」など2例、チュクチ語のみとの対応を示す語彙は No.604「歌」など2例、チュクチ語・コリヤーク語との対応を示す語彙は No.547「罾」など2例、またチュクチ語・アリユートル語、アリユートル語のみとの対応が見られる語が1例あった。

イテリメン語北部方言は南部方言と比較してコリヤーク語からの借用語が多いことが以前から指摘されており、ここに挙げた語彙の大部分は隣接した民族との接触による借用語と考えられる。また、地理的にコリヤーク語とアリユートル語を飛び越えたチュクチ語との語彙の共通性についても精査する必要があるだろう。

3.2.2.2. 南部方言と形態的対応が見られる語彙

イテリメン語南部方言と、チュクチ・コリヤーク諸語との間に形態的対応が見られる語彙は9例あった(表9)。

⁴ ixoplixop はネズミを捕る罾, enat は輪状の罾である。

表9 SI, NI が形態的に異なり, SI とチュクチ・コリヤーク諸語に対応が見られる語彙(9)

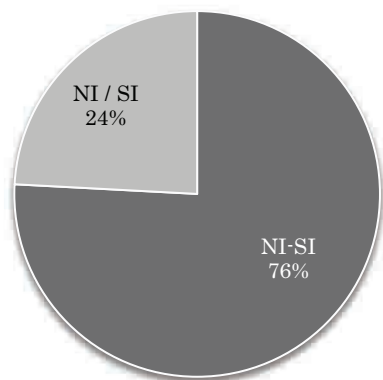
No.	Rus	JPN	SI	NI	K	A	Ch
153	облако	雲	jajaŋ , ŋizal	muqmuq ⁵	jəʃən	jənaʃən	jʃən
339	плавать	浮く	pwatkas	wikes	pəyatək	pəyəʎʔatək	pəyəʎqewək
204	дедушка	祖父	mitx	xeqem, d'ed'ucy	appapil', apappo	ənpəʔəlləyən	miryan
615	волна	波	mumwum	χixezic	məyən	muməy	ejəsyin
811	толочь	突く	teles	tniles	jimʎecʃavək	talak	talak, talatkok

チュクチ語・アリュートル語・コリヤーク語との対応が見られる語彙は No.153 「雲」, No.339 「浮く」など3例, チュクチ語のみとの対応を示す語彙, アリュートル語・コリヤーク語との対応を示す語彙がそれぞれ2例, チュクチ語・コリヤーク語, チュクチ語・アリュートル語との対応を示す語彙が1例ずつである。南部方言でチュクチ・コリヤーク語との対応が見られる語彙は, 北部方言と比較すると半分以下と少ない。

4. イテリメン語南北方言の形態的同異の割合とチュクチ・コリヤーク諸語との対応

以上, イテリメン語の方言とチュクチ・コリヤーク諸語における語彙について, 形態的な対応関係から分類を試みた。イテリメン語の両方言間の語彙の同異から見た, 語彙の構成の割合を(1)に表す。

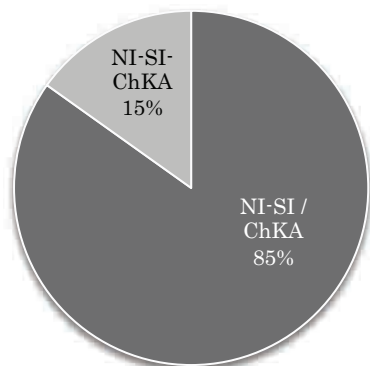
(1) イテリメン語南北方言全体の語彙の構成



イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源の語彙 (NI-SI) は全体の約 3/4 を占め, 北部方言と南部方言で形態的に異なる語彙 (NI/SI) は約 1/4 ある。イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源の語彙の内訳を(2)に示す。

⁵ コリヤーク語 muqemuq 「雨」に対応。

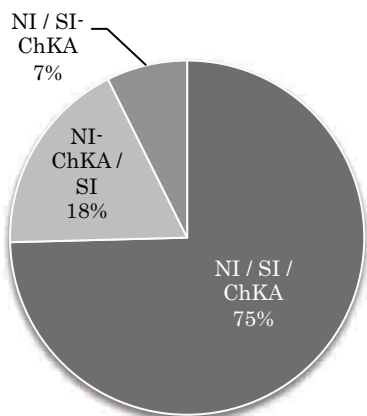
(2) 北部方言と南部方言で同起源の語彙 (NI-SI) の内訳



イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源の語彙 (NI-SI) のうち、イテリメン語とチュクチ・コリヤーク諸語で形態的差異の大きい語彙 (NI-SI/ChKA)は 85%を占める。また 15%がチュクチ・コリヤーク諸語との対応を示している (NI-SI-ChKA)。

次に、イテリメン語南部方言と北部方言で異なる語彙 (NI/SI) について、北部方言と南部方言の内訳をそれぞれ(3)と(4)に示す。

(3) 北部方言と南部方言で異なる語彙 (NI/SI)の内訳

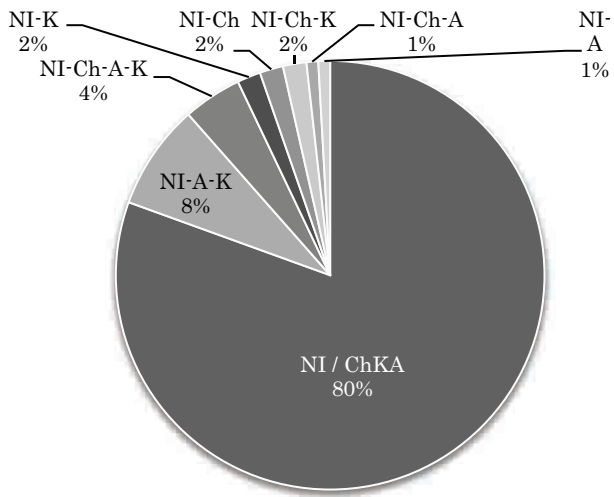


北部方言と南部方言で異なる語彙 (NI/SI)のうち、75%がチュクチ・コリヤーク諸語の語彙との形態的差異が大きい語 (NI/SI/ChKA)である。北部方言とチュクチ・コリヤーク諸語に対応が見られる語彙 (NI-ChKA/SI)は2割弱、南部方言とチュクチ・コリヤーク諸語に対応が見られる語彙 (NI/SI-ChKA)は1割に満たない。従って、チュクチ・コリヤーク諸語との共通要素は南部方言より北部方言の方が多いことが示されている。また、北部方言、南部方言、チュクチ・コリヤーク諸語でそれぞれ異なる語彙が4分の3もあるというこ

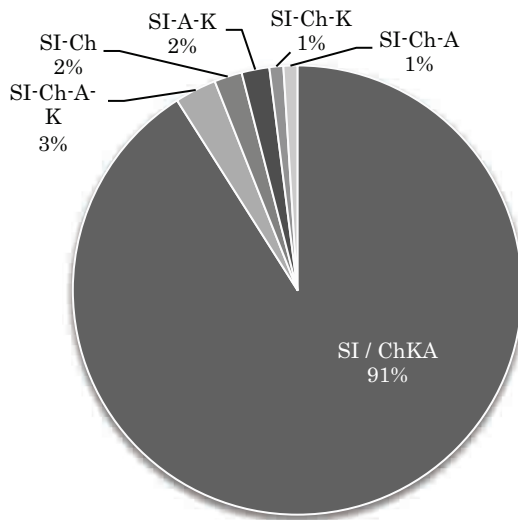
とから、北部方言と南部方言の語彙の違いがチュクチ・コリヤーク諸語との共通性（同起源あるいは接触による影響）のみならず、方言分岐により独自の語彙体系を持つに至ったと考えられる。

さらに細かく内訳を見てみると (4) (5) のようである。

(4) 北部方言と南部方言で異なる語彙 (NI/SI) のうち、北部方言 (NI) の内訳



(5) 北部方言と南部方言で異なる語彙 (NI/SI) のうち、南部方言 (SI) の内訳



イテリメン語北部方言と南部方言で異なる語彙について、北部方言においては北部方言に固有の語彙 (NI/ChKA) が約 8 割で、残りの 2 割程度をチュクチ・コリヤーク諸語と形態的対応を示す語彙が占

めている。対する南部方言では、南部方言に固有の語彙(SI/ChKA)は約9割、チュクチ・コリヤーク諸語と形態的対応を示す語彙の占める割合は約1割という結果になった。

本稿で比較した語彙項目数は決して多くはないが、それでも全体としてイテリメン語に固有の語彙が占める割合はかなり高いと言わざるを得ない。北部方言と南部方言で異なる語彙は、それぞれの方言に固有の語彙と、隣接する民族との接触による借用の両方が考えられる。また、北部方言の方がチュクチ・コリヤーク諸語との共通点が多いのは、地理的な近さゆえの民族間交流が南部方言話者よりも活発であったことの証であろう。イテリメン語とチュクチ・コリヤーク諸語で形態的に近い語彙が同系の証拠であるのか、それとも借用の結果であるのか、またイテリメン語に固有の語彙が基層言語に由来するのかどうかは、さらなる検証が必要である。

引用文献：

- Asinovskij, Aleksandr S., Volodin, Aleksandr P. (1987), The typology of vocalic structures of the word in Chukchi-Kamchatkan languages, *Proceedings of the XIth International congress of Phonetic Sciences, Vol. I*, Tallin. 362-364.
- Bogoras, Waldemar (1922), Chukchee, *Handbook of American Indian Languages* (ed. by Franz Boas), part II. Washington.
- Fortescue, Michael (2003), Diachronic typology and the genealogical unity of Chukotko-Kamchatkan. *Linguistic Typology, Vol. 7*, 2003. 51-88.
- Fortescue, Michael (2005), *Comparative Chukotko-Kamchatkan Dictionary*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Georg, Stephan, Volodin, Alexander P. (1999), *Die itelmenische Sprache. Grammatik und Texte*. Tunguso Sibirica 5., Harrasowitz, Wiesbaden.
- Kurebito, Megumi (ed.), Tokusu Kurebito, Megumi Kurebito, Yukari Nagayama, Chikako Ono, Mitsuhiro Yazu (2001), *Comparative Basic Vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan Language Family: I*. Osaka Gakuin Univ.
- Worth, Dean S. (1961), *Kamchadal Texts collected by W. Jochelson*. Mouton, 's Gravenhage.
- Worth, Dean S. (1962), La place du kamtchadal parmi les langues soi-disant paleosiberiennes. *Orbis*, 1962, t. XI, No.2, 579-599.
- Worth, Dean S. (1969), *Dictionary of Western Kamchadal*. University of California Publications in Linguistics vol.59. Berkeley and Los Angeles.
- Асиновский А. С. (2003), *Сопоставительная фонетика чукотско-камчатских языков*. Диссертация на соискание ученой степени доктора филологических наук.

- Володин А. П. (1976), *Ительменский язык*. Наука. Ленинград.
- Володин А. П. (1997a), Палеоазиатские языки. *Языки мира. Палеоазиатские языки*. Индрик, Москва. 8-11.
- Володин А. П. (1997b), Чукотско-камчатские языки. *Языки мира. Палеоазиатские языки*. Индрик, Москва. 12-22.
- Володин А. П. (1997c), Керекский язык. *Языки мира. Палеоазиатские языки*. Индрик, Москва. 53-60.
- Володин А. П. (1997d), Ительменский язык. *Языки мира. Палеоазиатские языки*. Индрик, Москва. 61-71.
- Крашенинников С. П. (1949), *Описание земли Камчатки*. IV-е издание. М.-Л.
- Молл, Т. А. (1960), Очерк фонетики и морфологии седанкинского диалекта ительменского языка. *Ученые записки Ленинградского педагогического института имени А. И. Герцена*. т. 167. 193-222.
- Скорик П. Я. (1958b), К вопросу о сравнительном изучении чукотско-камчатских языков. *Известия АН СССР*. Отд.-ние лит. и яз., т.XVII, вып.6. 534-546.
- Скорик П. Я. (1961), *Грамматика чукотского языка. Часть первая. Фонетика и морфология именных частей речи*. Изд. АН СССР. М.-Л.
- Скорик П. Я. (1977), *Грамматика чукотского языка. Часть вторая. Глагол. наречие, служебные слова*. Наука, Ленинградское отделение, Ленинград.
- Жукова А. Н. (1972), *Грамматика корякского языка. Фонетика, Морфология*. Наука, Ленинград.
- Нагаяма, Юкари (2003), *Очерк грамматики алюторского языка*. Osaka Gakuin University.
- Стебницкий С. Н. (1934), Ительменский язык. *Языки и письменность народов Севера*. М.-Л., 85-104.
- 『アジア・アフリカ言語調査表 下』(1979), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 金子亨 (2011) 「イテリメン語も孤立言語だった」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』13 : 1-19.

(おの ちかこ・千葉大学人文社会科学部研究科特任研究員)

Dialects of Western Itelmen and Chukotko-Koryak Languages :
A lexical review of their genealogical relationship and/or language contact

ONO Chikako

Comparative studies of Chukotko-Kamchatkan languages (Chukchi, Koryak, Alutor, Kerek and Itelmen), have been carried out by several researchers. It seems certain that members of Chukotko-Koryak group, namely Chukchi, Koyak, Alutor and Kerek languages, are genealogically cognate. However, it remains still controversial whether Itelmen has genealogical relationship with the Chukotko-Koryak group.

In this paper I attempted to (a) compare the lexicons of Southern dialect with Northern dialect of modern Western Itelmen based on larger data from fieldwork of recent years, (b) distinguish cognate lexicons from non-cognate ones, (c) specify where the cognition and non-cognition come from, (d) clarify an entire lexical structure, thereby (e) build a foothold to re-considering the relationship of Itelmen with Chukotko-Koryak languages including the genealogical attribution problem of Itelmen.

As a result, it is found that Northern and Southern dialects of modern Western Itelmen have 76% of cognate lexicon (almost same morpheme for two dialects) and 24% of non-cognate (different morpheme between the dialects), and that the two dialects have also high percentage of lexicon that is unique for each dialect, but non-cognate with lexicon of ChKA languages. It needs further research in detail with each lexicon of each dialect to clarify whether Itelmen lexicon that morphologically correlates with those of Chukotko-Koryak languages is based on genealogical relationship or a result of language contact.